

—糞転がし、ファーブルとダーウィン—

(記 岡本)

近頃、昆虫への関心が再燃し、昆虫関連の本を読んでいる。「虫屋」の作家、北杜夫が著した「どくとるマンボウ昆虫記」を読んでいて、日本には棲息しない糞転がし「スカベラはエジプトを発祥地とする。南仏に分布していて、ファーブルの『昆虫記』を彩った。同族のものは朝鮮にもいる。また、台湾にも近似の玉を転がす種類が棲んでいる。」という一節を見つけた瞬間、済



州島の牧場で見つけた一頭の甲虫がスカベラに酷似していたのではないか、ということ思い出した。牧場で一緒に獲ったダイコクコガネはカブトムシのように堂々としていたので写真に撮ったが、2センチ程のその甲虫は拙速な細密画が残っているだけである。素人目にはスカベラそっくりであるが、確かめようがないままである。

済州島の糞ころがし (岡本氏描写)

糞転がしスカベラといえば、ファーブルの「昆虫記」第一巻の冒頭と第五巻に観察記録が載っている。古代エジプトでは、死からの復活と不死の象徴の聖なる虫として神格化されていた。その時代から約5000年間、聖なる虫を科学的に観察したのはファーブルが初めてだという。ファーブルは40年以上の長きにわたってスカベラを研究対象にしてきた。

早速、「ファーブル昆虫記」(注1)を読もうとしたが、10巻という浩瀚の書物に、たじろいできて代わりに手にしたのは、虫屋の仏文学者奥本大三郎が訳した「ファーブル驚異の博物図鑑」である。

「種の起源」を読んだことがなくても、著者ダーウィンの名前はほぼ誰でも知っている。実は、フランス人ジャン=アンリ・ファーブル(1823年~1915年)とイギリス人チャールズ・ロバート・ダーウィン(1809年~1882年)は、生年に14年の差があったが、同時代を生き交流があったという。両者には境涯や学問の立場上対照的なところがあった。

ダーウィンの父親は裕福な医師で、母親はイギリス産業革命時に陶器で早々に成功を収めたジョサイア・ウエッジウッド(注2)の娘である。ダーウィンは22歳の時、ビーグル号に乗船して世界一周する5年間の調査航海をし、帰国後「ビーグル号航海記」を出版した。父親の援助でロンドン近くの大地主として独立し、研究に励んだ。ダーウィンがビーグル号に乗船し赤道直下の孤立したガラパゴス諸島の島々に寄った際、ほぼ同一のフィンチ(小鳥)が十数種いることに気が付き、各鳥によって頭や嘴が僅かずつ異なっているのに注目したのが、進化論着想に繋がったという。1859年に「種の起源」を出版、その中で自然選択説を「有利な変異は保存(選択)され、不利な変異は排除(淘汰)される。」過程と定義し、長い時間をかけて自然が選択を行なっているとした。

ファーブルはダーウィンとある意味で対蹠的な境涯にあった。南仏の貧しい百姓の子として産まれて、7歳まで「生涯に一度も本を開いたことがなかった」祖父母に育てられ、その後、父親の仕事が長続きせず一家は引っ越しを繰り返した。ファーブルは孜孜として勉学に努めた。数学、物理の学士号をとり、小学校、高等中学校の教師となった。それでも収入は金持ちの馬丁の給料

より少なかったという。32歳でソルボンヌ大学の博士号を取得し、その後40代に多くの小本を出版、漸く印税収入で十分に暮らせるようになり、1870年に教員を辞職した。その後、1879年56歳でアルマスに理想の土地を見つけて引越した。この時に「40年間というもの、私は一歩も譲らず貧困と闘ってきた。そうしてあれほど欲しかった研究の場が到頭手に入った。誰にも邪魔されず、時間の半分を虫の観察に費やし、残り半分を本の執筆に充てられるようになった。」と述懐している。アルマスに引越した1879年に、引越し前の時期に行った観察をまとめた「昆虫記」第1巻を出版し、その後、ほぼ3年毎に1冊の割で10巻(1907年)まで出版した。内容は観察研究した虫の生態は勿論だが、自伝風の物語が織り込まれた体裁になっている。1915年92歳の長寿を全うした。



ダーウインが学説論争の学界の方を向き、ファーブルは虫の生態観察のため腰を屈めて地面に向いていた。ダーウインがファーブル宛に様々な実験を依頼した手紙が残っており、2人のある意味で親交があったものの、生い立ち、研究分野、方法論の差もあって、見解の違いがあった。ファーブルはダーウインに「尊大な人間の科学よ、もっと謙虚になるがいい。」との感情を持っていたという。バツサリ切って言えば、進化論対創造論の対立とも言えるものだった。

ファーブルは狩バチの観察に基づいて、本能は種の発生から元々備わったものと考えた。狩バチの狩のための精密で的確な行動が何千年も手探りするように進化を続け、自然選択により到達できたとは到底考えられず、たとえ、この概念(創造論)が説明できないものだとしても、こうした行動は種が発生した時点で完成していたはずだと主張する。本能の能力は進化で得たものではなく、神に授けられた知恵だとしている。1882年にダーウインが亡くなった後、反論してくれる好敵手を失ったファーブルは、進化論批判を続けていくが、それが科学者としての彼の名声を傷つける結果ともなった。

ファーブルはスカベラの生態について口を極めてその美しさを描写している。スカベラは獣の糞を集め、糞の下に潜って中肢と後肢を使って巧妙に糞球を形造る。後肢を糞球に懸けて後ずさりしながら巣穴に運び、何日もかけて糞を食べたり、また球を美しい梨型の梨球を形造る。この梨球に「ああ！突如輝きわたる真理の聖なる喜びよ。これに比べることのできるような喜びが他にあるだろうか！」と驚嘆し、梨球に産みつけられた卵が孵化した幼虫について「肥り、脂ぎっている。汚い原料がつやつやと健康的で象牙のように白くスレートのような青みを帯びた、一点の汚れもないでっぷりした幼虫に姿を変えるのだ。」と叙述している。脱皮した蛹についても「昆虫の世界において簡素な美しさの点では、皮を脱いだばかりのこの柔らかな蛹に匹敵するものはほとんどあるまい。」と梨球、幼虫、蛹を褒めちぎっている。満腔の感情を一気に横溢させる感性の持ち主、ファーブルだからこそ、生涯生態観察に執着し10巻の昆虫記を世に送り出し得たと思う。(了)

注1) ファーブル昆虫記 日本初のファーブル昆虫記の翻訳者は、無政府主義活動家大杉栄(1885年~1923年)で、1922年に第1巻が出版された。大杉は獄死し、後を継いだ5人によって1936年に完成した。絶大な人気を博した。現在まで全巻の邦訳は六つある。

注2) ジョサイア・ウエッジウッド 「英国陶工の父」と呼ばれ、1759年現在も世界最大級の陶器メーカーであるウエッジウッド社を創立した人物。

参考図書

- 「どくとるマンボウ昆虫記」 北杜夫著、新潮文庫昭和 41 年刊
- 「フェアブル驚異の博物図鑑」 イブ・カンブフォール著、奥本大三郎訳、
エクスナレッジ(株)2016 年刊
- 「ビーグル号航海記」 ダーウィン著、荒俣宏訳、平凡社 2013 年刊
- 「ビックヒストリー、宇宙開闢から 138 億年の人間史」 デビッド・クリスチャン他 2 人著、
日本語版監修長沼毅、明石書店 2016 年刊